Link テーマ① なぜ「時間を守る」ようになった？

関連するページ ➡ p.39 p.53 p.65

世界と日本×歴史と現在

私たちは普段，時間を守ることや時間にもとづいて行動することは大切なことであると考えています。しかし，このことは歴史的にみて当たり前のことではありませんでした。では，私たちはいつごろから「時間を守る」ことが大切だと考えるようになったのか，資料を読んで考えてみましょう。

① 近代以前の日本の時間　～江戸時代の時間認識～

資料 A　カッテンディーケがみた日本

「日本人の悠長さといったら呆れるくらいだ。…(船の修理に必要な)材木を注文し，…漸くその船を修理台に引き揚げようとする段になって，材木がまだ届いていないという始末で…」

（カッテンディーケ著，水田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』）

➡1 カッテンディーケ（1816～66）　オランダ海軍軍人・政治家。1857年，江戸幕府が建造を依頼したヤーパン号（咸臨丸）を日本まで回航し，幕府が設立した長崎海軍伝習所で1859年まで教官をつとめた。

⬆2 オールコック（1809～97）　イギリスの外交官。1859～64年に駐日総領事・初代駐日公使をつとめた。

資料 B　オールコックがみた日本

Ⅰ　「東洋では，あるいは東洋人にとっては，時間はけっして高価なものではないから…」

Ⅱ　「まったく日本人は，一般に生活とか労働をたいへんのんきに考えているらしく，なにか珍しいものを見るためには，たちどころに大群衆が集まってくる。」

Ⅲ　「自分の農地を整然と保っていることにかけては，世界中で日本の農民にかなうものはないであろう。田畑は，念入りに除草されているばかりか…目に見えて整然と手入れされていて，まことに気持ちが良い。」

（オールコック著，山口光朔訳『大君の都：幕末日本滞在記』）

本節では世界と日本のむすびつきや，歴史と現在のつながりについてコラムでみてきました。ここでは1つのテーマについて，もうすこし踏みこんで考えてみましょう。

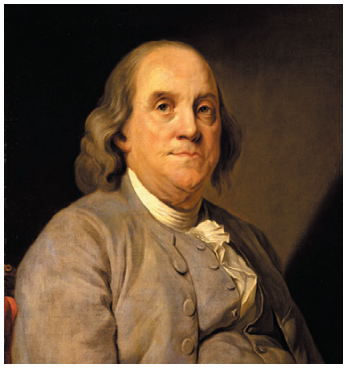
ステップ1　資料Aと資料BのⅠ・Ⅱからわかる江戸時代の日本人の時間意識について，当てはまる語句を選んでみよう。

江戸時代の日本人が【　時間や期限を守る　・　時間や期限に無頓着な　】様子が読みとれる。当時の日本は，現代の一日を等分して時刻を示す定時法ではなく，昼と夜を等分して時刻を示す不定時法が使われ，季節によって1時間の長さが異なった。そのため，江戸時代の日本人の時間認識は【　大まかなもの　・　正確なもの　】だった。

ステップ2 資料Bから読み取れる日本人の仕事に対する意識について，当てはまる語句を選んでみよう。

資料BのⅠ・Ⅱからは，日本人の時間感覚と労働に対する【 大らかな様子 ・ 厳しい様子 】に驚き，あきれている様子が読みとれるいっぽう，資料BのⅢは日本の農民の仕事ぶりを【 称賛 ・ 非難 】する記録を残している。時間感覚が現代と異なっていたとしても，日本人の仕事ぶりそのものは勤勉でまじめだったことが資料から推察できる。

② 欧米の労働者の時間や仕事に対する意識 ～18世紀前半の様子～



↑3 フランクリン（1706～90） アメリカの実業家・政治家・科学者。印刷業で成功し，稲妻が電気の放電であることを明らかにした。アメリカ独立戦争（→p.39）の際に外交官として，フランスとの同盟締結に成功した。

資料 C 18世紀，フランクリンが10代の終わりにイギリスにわたり，印刷工として働いたときのこと

「私の飲み物は水だけだったが，50人近くもいた他の職工たちは，みんな大のビール党であった。…私の相棒などは，朝食前に1パイント（568ml），朝食の時にチーズをはさんだパンと一緒に1パイント，朝食と昼食の間に1パイント，昼食に1パイント，午後の6時ごろに1パイント，1日の仕事がすんでからもう1パイント，毎日これだけ飲むのだった。」

「（私は）決して休まないので ―現に私は聖月曜日※をきめこむといったことはなかった― 主人の気に入り，それに植字が並はずれて早いので，急ぎの仕事というといつも私が仰せつかったものだ…」

※労働者などが日曜日に深酒して月曜日に欠勤すること。あるいは，仲間たちと月曜日も飲み続けて欠勤すること。フランスなど他の国々でも同じような「習慣」があった。

（フランクリン著，松本慎一ほか訳『フランクリン自伝』）

ステップ3 資料Cの18世紀前半のイギリスの労働者とフランクリンの仕事ぶりを比較してみよう。

資料Cではビールを飲んで仕事をする労働者が示されており，18世紀前半のイギリスの労働者の規律が【 きびしかった ・ ゆるかった 】ことが読みとれる。しかし，「午後の6時ごろ」や「1日の仕事がすんでから」などの表現から，フランクリンの相棒も【 不定期 ・ 決まった時間 】にビールを飲んでいることがわかる。仕事に対する姿勢は別として，時間で労働を管理するようになったことが推測される。また，フランクリン自身は【 時間をかけて丁寧な ・ 早くて正確な 】仕事ぶりが評価されている。その後，欧米社会は大きな変革期をむかえ，この変革期を経験した19世紀の欧米諸国の人々には日本社会が資料A・Bのようにみえていたのである。

トライ！ 深める ステップ3 波線部について，時間にもとづいて行動するようになった背景として考えられる，18世紀後半から19世紀にかけて欧米社会が経験した大きな社会の変化として最も適切なものは何だろうか，次の選択肢から選んでみよう。

①産業革命によって機械化がすすみ，効率的に労働することが求められた。
②フランス革命の際に，ナショナリズムの考え方がひろまり身分制への批判が高まった。
③アメリカで開拓により西部地域への白人移住がすすむいっぽう，先住民が故郷を追われた。